

## カンボディア・ 西トップ寺院の調査

奈良文化財研究所は、カンボディア・シェムリアップ地域文化財保護開発機構(APSARA)と共同して「アンコール文化遺産保護共同研究」をおこなっており、アンコール・トム(宮城)遺跡内にある西トップ寺院を継続的に調査してきました。今回は第6次調査にあたり、考古班と建築班によって今年1月下旬から2週間ほどの調査をおこないました。

西トップ寺院は上座部仏教の寺院で、中央に大きめの塔(中央祠堂)と、その脇の南北に小さめの塔が一基ずつ、さらに東側にテラスが迫り出しており、かつてはその上に瓦葺の建物があつたようです。しかしこれはあくまで最終的な形態で、もともとは10世紀ごろにヒンドゥー教の寺院として、まず今より一回り小さなラテライト基壇の中央祠堂が建てられ、そのあと一部の石材を転用しながら今見る砂岩製の中央祠堂が建立され、続いてふたつの小塔が付け足され、さらに14~15世紀頃に上座部仏教が盛んになると、テラスが増築されて仏教寺院へと改築されたようです。

今回の調査では、テラスの東端から門にかけての前庭部を発掘し、テラスや周壁などの構築方法を確認しました。さらに部分的に掘り下げたところ、レンガや石材を並べた下層遺構が姿をあらわしました。とりわけレンガは、この遺跡で今見ることのできる建築にはまったく使われていない建材です。層位的には、この下層遺構はテラスや周壁が作られるより前の時期にさかのぼると考えられます。レンガは、アンコールでは11世紀頃まで主要な建材として用い



レンガなどが並ぶ  
下層遺構(北から)



バナナに線香を  
挿してお参り

られ、たとえば10世紀に建てられたブラサート・バイ寺院では見事なレンガ造りの祠堂を見ることができます。もちろん、レンガはあらゆる時代に用いられた建材のため、それだけで時期を特定することはできません。今回の調査では、下層遺構の上面だけを検出するにとどめましたが、次回以降の調査によって、その年代や性格をよりはっきりさせることができるでしょう。ただ、この遺跡が存続する何百年もの間、さまざまな増改築がおこなわれ、たびたびその姿を変えてきたことは確実なようです。

この西トップ寺院は、メインの観光ルートから離れていることもあり、訪れる人も少なく、普段はひっそりとしています。それでも調査中に、白い服に身を包んだ尼さんたちがお参りをする姿を目にすることもありました。この遺跡が、今なお信仰の場として生き続けているということに、あらためて気がされました。(企画調整部 石村 智)



西トップ寺院の周囲を踏査する調査団員